

平成24年度末に富本憲吉記念館所蔵の資料558点の寄贈に引き続き、平成26年4月に富本憲吉記念館所蔵の資料の追加寄贈を受け、富本憲吉記念館所蔵の資料は全て本学へ移管された。

富本憲吉（1886-1963）は、人間国宝、文化勲章受章者であり、本学の前身である京都市立美術大学で教授、学長を務め、陶磁器専攻科を創設した近代を代表する陶芸家です。富本の陶磁器に対する造形的思考は現代陶芸に一貫するものであり、その影響を受けた陶磁器関係者は多岐に渡ります。その思考の原点であるバーナード・リーチとの交換書簡や渡英時の書簡やその他の書簡、書籍などから、富本の造形的思考の源泉を明らかにし、近代・現代工芸における西洋的造形思想と日本の工芸の関係性を探求する事が本研究の目的です。

平成26年度は、「富本憲吉アーカイブ・辻本勇コレクション」研究の主たる資料であるバーナード・リーチとの往復書簡の研究が立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点において「富本憲吉とバーナード・リーチ往復書簡の研究—京都市立芸術大学所蔵資料を中心に」として共同研究に採択されました。バーナード・リーチ往復書簡については、立命館大学において翻刻作業を行い、「富本憲吉—バーナード・リーチ往復書簡」のデータベース制作を行いました。

本学において、平成26年度は、新たに本学に寄贈された資料群の整理と研究を行うと共に、昨年度のシンポジウム「富本憲吉のことば」中で取り上げた『わが陶器造り』の出版に向けた準備を行っています。『わが陶器造り』は富本憲吉が京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）の着任に際し、教科書として執筆した未定稿の著書である。随所に富本の作陶観、作品観である因襲にとらわれず陶芸の本質を追求し、きわめて知性的な芸術論を持って、オリジナリティーある陶芸を創造する事がいかに大切かを、やきものの歴史、技法を通して語られています。本著は、富本憲吉という陶芸家としてのあり方の軌跡だけではなく、日本の陶芸、工芸のあり方に対する提言と言うべき内容です。それは、教科書の範疇を凌駕した内容となっており、近代・現代工芸における西洋的造形思想と日本の工芸の関係性を探求において、非常に重要な著書です。

本著の刊行にあたり、オリジナルの収録とともに、ガリ版刷の翻刻と、富本が本著で記しているが実現出来なかった写真や説明図を新たに加えます。また、昨年、京都国立近代美術館で行ったシンポジウム「富本憲吉のことば」より、乾由明先生、柳原睦夫先生、森野泰明氏が行った鼎談を収録し、平成27年5月に里文出版より刊行予定である。

平成27年度はリーチとの往復書簡に関しての共同研究者である、鈴木禎宏氏との共同研究を行い、平成28年度にはその成果として、「富本・リーチ往復書簡」を前崎、鈴木の共著にて出版を予定している。